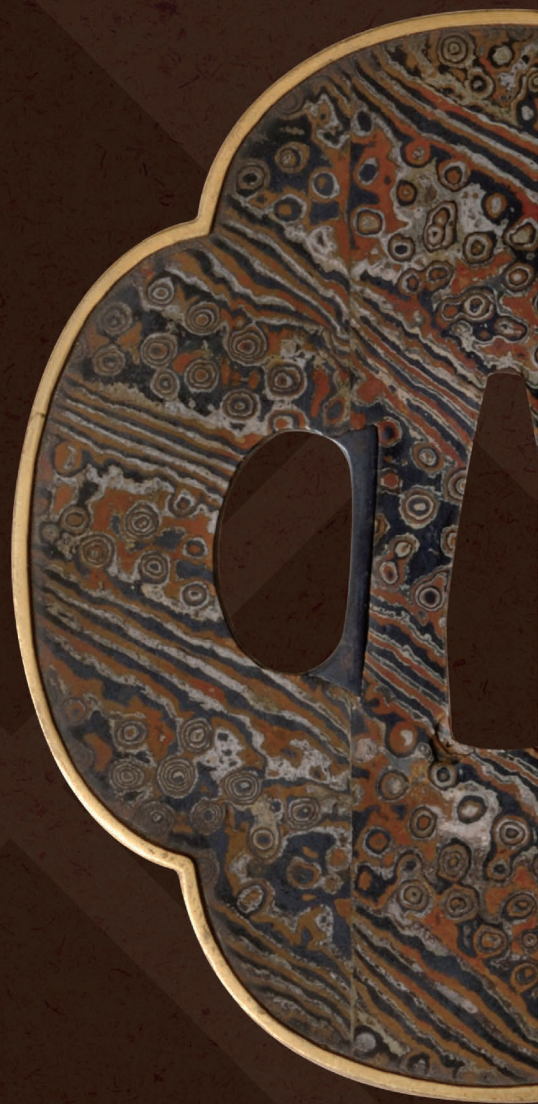


温故知新で 未来につなぐ 木目金

も く め が ね



木目金とは、色の異なる金属を幾重にも重ね合わせたものを丹念に鍛え、美しい木目状の文様を作り出す金属工芸技術である。

作り手の思いと偶然性が重なり合って現れる金属の表情には深い味わいがある。

江戸時代に生まれた木目金^{つば}は武士の刀の鐔などに施されていたが、廃刀後に伝承が途絶えた。

しかし現代になって復元のための研究が進み、

ジュエリー・デザインの一つとして新たな魅力を発信している。

江戸時代初期、刀装具職人によって誕生した木目金

無機質な金属も、人の知恵と技が加わることで温もりのある表情へと姿を変える。その名の通り、年輪のような美しい木目文様を生み出す木目金は、どこか懐かしいのに新しく、平面的な文様ながら立体的な印象を覚えるのも不思議だ。その歴史や文化を知れば知るほど、金属が持つ可能性の奥深さに引き込まれていく。

木目金の歴史は今から約400年前の江戸時代初期、刀装具の職人だった出羽秋田住（出羽ノ国、現在の秋田県在住）正阿弥伝兵衛が考案した、「グリ彫り」の鐺に始まると伝えられている⁽¹⁾。グリ彫りとは、色の異なる金属を幾重にも重ね合わせたものの、唐草や渦巻きの文様を彫ったものである。その起源は諸説あるが、中国で宋から明の時代に作られた「屈輪」が発祥との説が一般的だ。朱、黒、黄などの色漆を何層にも塗り重ね、蕨型の曲線を彫り入れる技法で、寺院建築の意匠などに用いられた。日本には室町時代に輸入され、茶道具として珍重された。

グリ彫りの凹凸部分を叩いたり、ねじったりして平らに延ばせば、独特の文様が生まれるかもしれない——。そのことに気づいた正阿弥伝兵衛が、素材の漆を金属に変えて試してみたことから、木目金という技法が

刀の鐺

戦国時代は鉄製で簡素であった刀装具も、江戸時代になると華やかな装飾に姿を変えた。



グリ彫り鐺 高橋興次作

興次作のグリ彫りは端正ながら肉置きもたっぷりしていて堂々とした立体感がある。



印籠と根付(漆 江戸時代後期)

最も典型的な形状のグリ彫りの印籠。根付もひょうたん型の中では基本的な形。

生まれたのではないかとされている。

正阿弥伝兵衛によって生まれた木目金の技術を完成させたのは江戸時代中期、グリ彫りの得手として活躍した高橋正次の門弟、高橋興次である。以来、木目金は矢立や煙管などの実用品に用いられて江戸の民衆文化に浸透し、印籠や煙草入れなどの小物に施されるようになった。しかし明治9年に廃刀令が公布されると、武器としての刀の製作は禁じられ、刀工たちは廃業に追い込まれた。

木目金の伝承も途絶え、一時は「幻の技術」と呼ばれるようになったが、熱意ある研究者や職人たちの手によって再び技術をよみがえらせることができた。そして今、木目金はジュエリー・デザインの世界でも魅力ある存在として人気を博している。

使用する金属の種類に見られる幾多の変遷

そもそも江戸時代に木目金の素材として使われていたのは、銅、銀、金と、銅に銀や金を混ぜた銅合金のみであった。銅と銀を3:1で混ぜ合わせたものを「四分一」といい、銅と金を100:3で同様にしたものを「赤銅」と呼んでいた。日本では「煮色着色」と呼ばれる伝統的な仕上げ方法が用いられた。通常水1Lに対して硫酸銅と緑青を3gずつ入れ、沸騰させた液の中に脱脂した金属を浸し煮込む方法である。金属によって煮込む時間はさまざまだが、約40分で銅は朱色に、赤銅は黒く、四分一はグレーに

変化する。煮込む液の成分により微妙に異なる何種類もの色を得ることができ、銅、赤銅、金、銀と合わせると日本独特の多彩な表現が可能となった。

とはいえ、煮色着色は金属の表面が変色するだけであり、材質そのものが変化するわけではない。着色層は非常に薄く、絶えず何かに触れるようなものには使用できない。そのため装飾品などに用いられる現代の木目金には、ピンクゴールドやイエローゴールド、ホワイトゴールド、シルバーやプラチナといった元来色の異なる金属が使用されている。

金属を原子レベルで密着させる「拡散接合」

木目金の制作工程は、何種類もの金属を重ね合わせたミルフィーユ状の地金を作ることから始まる。

金属は溶接しなくても平坦で清浄な面同士を密着させれば接合できる。しかし、金属材料の表面には原子サイズの凸凹があり、汚れていたり、厚い酸化皮膜で覆われたりする場合もある。このような面を突き合わせて接合するには、いかに接合面上の酸化

木目金の制作工程

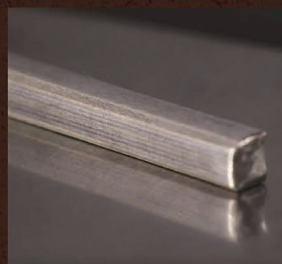
色の異なる金属板を接合し、彫りやねじり加工を施し平らにすることで木目文様となる。



素材の金属板



拡散接合



接合した金属板



ねじる



彫る



延ばす



木目金板

皮膜を取り除き、接合させるかが大きなポイントとなる。木目金の地金を作る際に用いられるのは「拡散接合」である。金属板の表面を炭研ぎして平滑にし、入念に脱脂・洗浄作業を行った上で加熱及び加圧を施し、原子の拡散を利用して接合する。出来上がった木目金に金属の積層が明瞭に現れるのは、接着剤を使用しない拡散接合技術によるところが大きい。

木目金の最も一般的な文様の制作方法は彫りによるものである。始めに、^{たがね}鑿を使って地金をすくい取るように何層か掘り起こす。その後、地金を徐々に薄く打ち延ばし、丹念に鍛え、さらに彫りを加えたり、ねじっ

たり、曲げたりなどの作業を繰り返し、再び平らに打ち延ばすことで、凸凹のない美しい文様が出来上がる。

復元研究制作で往時の作り手の思いを追体験

日本発祥の木目金は世界でも「Mokume Gane」として知られ、ボストン美術館やデンマーク工芸博物館などでも作品が所蔵されている。日本が世界に誇る伝統金属工芸技術を現代に活かしたいとの思いで、その復元研究制作に取り組んだのは

高橋正樹氏（（株）杳目金屋代表取締役、NPO法人日本杳目金研究所を立ち上げた美術研究者）。復元のための研究の題材となったのは、最古の木目金と言われる出羽秋田住正阿弥伝兵衛作の小柄をはじめ、吉野川の桜や竜田川の紅葉を描いた高橋興次作の鐔などである。

高橋氏は完成物そのものよりも、江戸時代の職人が制作工程の中で何を考え、どのように素材と対話をしながら制作に取り組んだのかを追体験できることに意義を見出した。それは、単に金属の表面に独特な文様を作り出す加工技術だけが木目金本来の価



様々な加工によって表情を変えていく木目金

（上）ねじり加工で作る文様も基本的な加工の一つ。万力を使い地金を焼きながら、ねじる。（中）彫り加工。（下）平坦に延ばした地金。

竜田川図鐔 高橋興次作

木目金の文様を効果的に地紋として取り入れた作品。復元研究の題材の一つにもなった。



偶然が生み出す文様に魅せられて

SCIENCE & INNOVATION



復元制作された木目金

秋田県指定有形文化財 小柄 金銀地杢目鍛 銘 正阿弥伝兵衛
江戸時代中期 金、銀、赤銅、素銅
復元制作 高橋正樹

値ではないと考えるからだ。金属素材の変化を感じ取った制作者の思いや気持ち、そのまま文様に現れることも木目金の魅力となっている。

唯一無二の文様を活かした結婚指輪

文様の美しさもさることながら、手作りであるがゆえに同じ文様を二度と再現できないのが木目金の特徴である。その唯一無二の文様を活かし、高橋氏は結婚指輪を制作した。一つの指輪を新郎新婦となる二人

の手で二つに分けて作るフルオーダーの結婚指輪だ⁽²⁾。木目金を単なる伝統工芸として扱うのではなく、人の営みと関連させて技術を伝承していることが興味深い。古きを温ねて新しきを知る“温故知新”の精神で木目金が追求されている。約400年前に誕生した木目金は、これからも人々の生活や文化に寄り添いながら、作り手の思いを載せて未来へとつながっていく。

(取材協力、画像提供：(株) 杢目金屋、NPO法人日本杢目金研究所)



木目金を施した結婚指輪

新郎新婦となる二人の手で一つの指輪を二つに分けて作る結婚指輪「つながるカタチ」。2015年グッドデザイン賞、2016年、2017年のドイツのRed Dot Design Award、2018年 iF Design Awardを受賞している。

文 献

- (1) 木目金の教科書【新装版】企画・監修 高橋正樹+日本杢目金研究所
- (2) 株式会社杢目金屋ホームページ：<https://www.mokumeganeya.com/>

INTERVIEW

新しい価値や魅力を発信できるモノゴトづくりへ

未だに詳細な研究がなされていない木目金のミステリアスな部分にロマンを感じている。また、一般的な金属加工は、作り手の行為がそのまま文様を含めた姿形に反映されるため、基本的に自分の技術を超えるものを作ることはできないが、木目金の場合にはそこに“偶然性”がある。したがって、自分の想像を超えるような出会いがあり、素材と対話することによって、作業工程ごとにさまざまな発見ができる。それがとても刺激的だ。

自分の我を通すだけでは良い作品は生まれない。素材がスムーズに形状を出せるよう、こちらがサポートするような形で作業を進めていくことが大切だ。その意味で、復元のための研究は重要な意味があった。当時の職人もいろいろと試行錯誤を重ねていたと思う。だからこそ、後世に残る素晴らしい作品が誕生したのだということを確認し、理解することができた。単に古いものと同じものを作るのとは全く別の次元のものだった。

結婚指輪を考案したのは、オリジナリティのある、世界に一つの指輪を提供したいと考えたからだ。そこで、もともとつながっていた文様を二人で

分かち合う体験の記憶が指輪に痕跡として残るデザインを開発した。お客様にとっても我々にとっても意義のある作品になったと思う。

今後は手作りだけに甘んじることなく、テクノロジーを取り入れ新しい木目金の世界を創造していきたい。江戸時代の作品の技術解明や資料の編さんにもより一層力を入れていこうと思う。これからの日本には、スペックだけを考慮したモノづくりというよりは、何か新しい価値や魅力を発信できるようなモノゴトづくりが重要だ。また、それをできるのが日本である。私は江戸時代から続く木目金を一つの“道”にとらえ、その神髄をさらに究めていきたいと考えている。



高橋 正樹 さん

株式会社杢目金屋
代表取締役 博士（美術）

人気の婚約指輪

結婚指輪にぴったりと重なる婚約指輪「恋風」。

